

【書評】

藤原孝章（編著）『時事問題学習の理論と実践—国際理解
・シチズンシップを育む社会科教育』

（福村出版，2009年）3,500円

吉田正生

（北海道教育大学教職大学院）

筆者は、『外国人労働者問題をどう教えるか』（明石書店，1994年）以来、実はひそかな藤原ファンである。ファンになった理由は簡単である。筆者が授業化したいと思っていたものを、氏が実に鮮やかに授業化されていたのである。

教材研究が緻密であり、しかもロールプレーなど、学習者の活動を核に据えたかたちで授業がつけられており、高校の先生だった方のなかにもこういう柔軟な発想のできる人がいるのかと驚かされた。

『社会科研究』（47号，1997年）に掲載された氏の論文「グローバル教育における多文化学習の授業方略」を読んだときの衝撃も忘れられない。やはり学習者の活動と社会認識を大事にした授業実践を提唱されていたからである。

今回の『時事問題学習の理論と実践』にも魅せられた。氏自身が書いておられるように本書が「時事問題学習の理論と実践を真正面から取り上げた」（3頁）ものだからである。

端的に言えば、本書は、様々な社会科論を抱いた人に各人が自己の論に合わせて「時事問題」単元を構成するにはどうしたらよいかを具体的に示した指南書である。

私は高校の社会科にあまり興味を持たなかったために「時事問題」が初期の高校社会科からいつ・なぜ消滅したのかなど基本的なことを知らなかった。本書からはそうした基本的なことも学べる。

しかし、なぜ、今、時事問題学習なのか。氏は、「時事問題」についての先行研究を手際よく紹介しながら、われわれが「時事問題」から学ぶべきことを述べている。それは「民主主義社会の形成という社会と関わる課題意識」（13頁）である。しかし、社会科教師はそうした課題意識はかなり

持っている。だから、むしろ氏の次のような指摘こそ重く受け止めたい。「それ（＝課題意識）を見失わない学習内容の創造や、具体的なものから一般的なものへ、経験的なものから系統的なものへといった学習を可能にする実践的な力量が、今も昔も教師に求められている」（13頁；ただし、括弧内語句及び下線は引用者）。

本書の魅力の1点目は、「実践的な力量」を上げる手がかりを理論だけでなく授業プランのかたちで示してくれていることである。

また、われわれ自身が新たに授業を創造できるようにと科学的認識や説明的知識を習得させるための授業プラン（2章）、合理的意思決定力育成のための授業プラン（5章）などと類型化して示してくれている。これが、本書の魅力の二点目であり、先に「指南書」と呼んだ理由である。

三点目の魅力は本書のサブタイトルに現れている。英国のシチズンシップやグローバル教育の教材がとりあげられている新しさである。氏の授業プランも共著者の方たちのプランも、題材とその切り口が新鮮であり刺激的である。

以上、紹介らしくない文章になってしまった。理由がある。氏が「まえがき」に懇切な解題を書いているのである。それを読めば本書の概要がつかめる。そこで主として本書の魅力を語った。

最後に疑問を。

氏は、合意形成型、社会参加型など主な社会科論を四つ示している。どれが最も時事問題学習にふさわしいのか。それとも、「みんないろいろ。だからいい」なのか。

カリキュラム構成原理は一つにしたいという私のような者にとっては、気になるところである。